

臨死体験者が地上で会ったことはなく、肉体の五感・脳では

知りえぬ情報を入手した臨死体験例

齋藤 忠賢

臨死体験の光の世界では、光の存在はグループ意識（ソウルファミリー）を形成していて、臨死体験者の自己意識のコアも、光の存在としてグループ意識の一員となる。

グループ意識を構成するのは、臨死体験者の肉体の地上での生に関わった人々ばかりではなく、地上での生を超えて過去や未来において関わった人々である。グループ意識はメンバーの全ての情報・体験を共有するので、臨死体験者は肉体から解放され光の存在として、このソウルファミリーであることが明らかになると、例え地上での生では全く関係を持たなかった死んだ親族でもソウルファミリーであると判明する。

臨死体験の中には、肉体時の地上での生では知るはずもない情報を、臨死体験中に入手するという例が多数見られる。①本人が地上に生まれる前にすでに死亡していて、一度も地上では会ったことも写真で見た事もない親族と臨死体験中に会うという例や、②臨死体験者に関わりのある人が突然死亡してしまい、その人が死んだことを臨死体験者本人も知らない人物に、臨死体験中に会うという例である。地上で会ったことも写真で見た事もない死んだ親族の場合は、その姿を想像することは不可能である。臨死体験中に会う人はすでに死んだ人に限られているから、死んだことを知らない人と会うのに心理学的には説明できない。このことはグループ意識の情報・体験の共有は、時間・空間の制約を超えているが、地上に生きる我々は、肉体内の感覚器官と脳によって情報を制約されているということである。

④ 臨死体験中に全く知らない死んだ親族と出会い、回復後に写真を見て初めて自分の

死んだ親族であることが判明するというケース

① E.アレグサンダーは、生後間もなく養子になったが、結婚をして子供を持つと、その子供

が学校で家系について調べるという課題を与えられ、自分の生みの両親について調べることになった。実の両親には実の妹が二人いたが、年下の妹は1998年に死亡していた。この妹はレイプ被害者支援センターで働いていて、それ以外の時間には捨て犬と猫の世話をしていた、生みの母はまるで天使の様だったという。2008年にE.アレグサンダーは大腸菌脳髄膜炎で大脳皮質の機能を完全に失い、知覚と感覚と言葉と記憶を一切失い、7日間昏睡状態に陥る。退院して4ヵ月後、実の年上の妹から、死んだ実の妹の写真が送られてきた。

長い茶色の髪の毛、きらめく青い目で笑っていて、愛と優しさに溢れている、それは私が臨死体験の時に出会ったあの天使のような女性であった。私の両目は涙でかすんでしまったという。¹⁾

② 「心停止して臨死体験中に、死んだ祖母と共に私の知らない一人の男性と出会った。それから10年後に私の母は死に際に、私が私生児であり、私の父は散在のユダヤ人の男性で第二次世界大戦中に殺されたと告白した。そして母は私に父の写真を見せてくれた。その写真には10年前に私が臨死体験中に出会ったあの見知らない男性が写っていた。それは私の父であった。」²⁾

この例では、本人は臨死体験中に会った人物が自分の父であることも、自分の父がすでに死んでいることも知らない。私生児だったので、母は死ぬ直前まで父親の事を内密にしていたことは確かであろう。

③ 息子は3歳の時に、心臓の病気で入院して開心術を受けた。手術後2週間頃、息子は「花が一本咲いていて動物が沢山いる、きれいで明るい場所にいつ戻れるんだろう？」としきりに尋ねる。私(母)が「ああ、あの公園ね。もう少し具合が良くなったら、みんなで一緒に行きましょうね。」と言うと、息子は「違うよ、公園じゃないよ。僕がああの人と一緒にいった明るい場所だよ。」と言う。「どんなあの人？」と聞くと、息子は「飛ぶ人。」と答えた。「ママ、その場所のことを忘れてしまったみたいだわ。何のことだが分からないの。」と私が言うと、息子は「連れて行ってくれたのはママじゃないよ。あの人と一緒に来てくれたんだよ。その人が僕の手を握ると二人で飛んだんだ。僕が心臓を治してもらっている間、ママは外にいたでしょう？でもそのあの人と一緒にいてくれたから大丈夫だった。すごく明るくていろんな色があった。けれど僕はママの所に帰りたくなかったんだ。」と言う。私が彼に「戻ってきた時、あなたは眠っていたの？起きていたの？夢を見ていたの？」と聞くと、彼は「起きていたよ。でも僕は天井の方において下を見ると僕は寝ていた。お医者さんが胸に何かしていた。すごく明るくて、僕はフワフワ降りて行ったんだ。」と言った。手術してから約1年後、私は息子と一人の子供が心臓手術を受けるシーンをテレビで見た。息子はひどく興奮して「僕もこの機械(体外循環装置)を使った。」と言う。「でも手術の時は眠っていたでしょう？機械が見えるはずないじゃない。」と私が言うと、「眠っていたのは知っている。でも上の方にいた時、見えたんだ。」と息子は言う。私が「眠っていたのに、どうして上から見る事ができたの？」と聞くと、息子は「だから言ったでしょ？あの人と一緒に飛んでいた時に。」と言う。その後のある日、亡くなった母が私と同じくらいの年齢だった頃の写真をしていると、息子は「この人だ、あの人だ。」と言った。この子供が手術を受けたのは3歳半で、死についての考えも臨死体験について聞くこともない。³⁾

④ ある女の子が臨死体験中に知らない人物に会う。回復してから、伯父さんの家に初めて行った時、母の父(祖父)の写真を見て、自分が臨死体験中に会ったのはこの祖父だったと言った。この女の子は、以前にこの写真を見た事はなく、他の親族はこの祖父の写真を持っていなかった。⁴⁾

この事例では、体験者は伯父の家に初めて行ったということ、母の祖父の写真は他の親族は所持していなかったことが事実なら、女の子は母の祖父の写真を見たと以前に見たということはないものと思われる。

⑤ 「手術後の激痛が原因で体外離脱をする。壁の後ろに死んだ父方の祖父母と、私が生まれる前に死んだ伯父を見た。そばに私の知らない人もいた。その人は金髪で背が高く、私に地上で生きると言った。そして私は自分の身体に戻った。回復してからこのことを父母に話すと、私の母はその私の知らない男性は母の父だと言った。その父は、母がまだ若い頃に死亡した。母は、私が母方の祖父母の写真を見た事はないと証言した。」⁵⁾

祖父の写真を見た事がないというのは少々不自然であるが、そのように証言されている。臨死体験中に会った未知の人物が母方の祖父であり、その祖父はすでに亡くなっていることも、臨死体験者は知らなかったことになる。

⑥ 喪服を着た中年の女性が、“鶴彦、お前は何をしにきたのだ？”と言う。焚火の所には、私が中学生の時に死んだ仲の良いところがいた。例の中年の女性は、私を近くに連れて行く。丘の向こう側には金色の光の世界があり、足元にはチューリップに似た花があり、花の色は赤・黄・白・紫等でペルシャ絨毯のようであった。丘を下りると、甘い香りと共に心地よい風が吹いている。暑くも寒くもない。遠くの光の一番濃い所から、光が飛んできて私の体を包んだ。まるで柔らかい布で包まれたほんのりとした温かさを感じる。退院して実家で静養中に両親と伯母が家族のアルバムを見ている。私とそのアルバムに目をやると、臨死体験中に会った中年の女性を見つける。父に尋ねるとその女性は、父の実の姉（伯母）で、私が生まれて間もなく若くして亡くなったと言う。私は会ったことはなく、写真を見た事もなかった。両親の私がこの伯母に会ったことはないことを知っていた。⁶⁾

この事例の場合、臨死体験中に会った人物が誰なのか分からず、ましてその人がすでに死亡していたことも知らなかったことは確かである。最も死んだ伯母に幼い頃に会ったことや、その伯母の写真を見たことがあるが、忘れてしまっていたという可能性は全くないわけではない。

⑦ 当時2歳だったキャロルは、父親のソリから落ち、放置されて肺炎にかかり臨死体験。背の高いスラッとした優しい顔をした髪の毛の薄い男性と会う。その男性はワイシャツ着と靴下吊付の短パンを着、靴を履きウエストには光る時計用チェーンを付けていた。この男性は、キャロルに自分のポケットから金の時計を取り出させた。その時計は「1時17分で止まっているのが、2歳なのに分かった。チェーンの反対側を引っ張ると、二枚刃のポケットナイフが出てきた。それは金色に光っていて、その上に飾りの渦巻があり、その飾りの反対側には花輪を1917年という数字が刻まれた盾があった。“これは私の名前だ。”と言うと、その男性は“私もキャロルという名前だ。これはあなたのものだ。”と言った。回復した後にキャロルが家族のアルバムを見ている時、キャロルは、臨死体験の時に会った男性は、自分が誕生した時より前に死んでいた祖父と分かった。祖父の時計、チェーン、金のポケットナイフ、時計が止まった時刻、ポケットナイフ上の日付等すべてが正解であ

った。しかし、祖父がこれらのものをキャロルに遺したという点は、誰も知らなかった。それから 20 年後にキャロルの母が書類を整理している内に、祖父の遺言状を見つけた。祖父の遺言状には、時計、チェーン、金のポケットナイフを、自分と同じ名前の孫娘キャロルに遺贈すると書かれていることを知ってキャロルの母は驚いた。祖父は将来の出来事を予知していたことになる。」⁷⁾

この事例は、臨死体験中に会った人物が誰なのか分からず、後に家族のアルバムを見て初めて自分の祖父だということが分かった。また、自分が誕生する 2 年前にすでに亡くなっていたことを知った。祖父がまだ生まれていない孫に、時計等を遺贈するという遺言状を残していたことは疑問も残るが、この論文での考察の対象ではない。

⑧ 麻酔が原因で手術中に心停止したある女性は、体外離脱をすると、一人の美しい婦人が出迎えてくれた。その婦人の方は、私を知っていたが、私の方はその婦人を知らなかった。光の人物が、私は地上に戻らねばならないと言っているのが聞こえた。その婦人は心配することはない。いつか私はここに戻ってきて、その婦人に再び会えるのだからと言った。それから 2・3 年後に私の母が、父方の祖母の写真を偶々私に見せてくれた。祖母は私の父の出産が原因で亡くなったのだという。その写真には私が臨死体験の時に迎えてくれた婦人が写っていた。私は祖母の写真は、それまで一度も見た事はなかった。⁸⁾

この事例では、臨死体験中に会った人物が誰なのか分からなかったが、2・3 年後に、偶々家族の写真を見て、体験者が誕生するずっと前に死亡していた父方の祖母であることが分かったということなので、これが事実だとすると、体験者の記憶から想像してイメージできるものではないことは明らかであろう。

⑨ ある女性が 5 歳と 20 歳の時に 2 回臨死体験をした。2 回共、白衣の男性にあった。2 回目の臨死体験から (20 歳) 15 年も経った時、偶々家族の古い写真の中に、臨死体験中に会った白衣の男性を見つけた。その男性は母方の伯父であった。その伯父はその女性が誕生する前に、第一次世界大戦中フランスで戦死していた。母も子供の頃、二度しかその伯父に会っていないし、伯父の事を一度もその女性に話したことはないという。⁹⁾

⑩ 48 歳の男性が臨死体験をし、光の世界で自分の義母と、彼がわずか生後 15 ヶ月の時に死んだ実母と出会う。父は再婚したので彼は実母の写真も見た事はなかった。回復後、彼の実母の写真を見せると彼は、すぐに自分の実母を当てることができたので、彼の父も驚いた。¹⁰⁾

⑪ 心停止で臨死体験をして、光の中で 1800 年代の長い茶色のドレスを着た、丸パン型の黒髪の女性に会う。私が“生まれた女の子の世話ができるように戻してほしい。”と言うと、彼女は私を地上に戻してくれた。私は一度もその女性に会ったことはない。回復後、この女性の事を父に話すと、父の母方の祖母のマリヤだと父は言った。¹¹⁾

⑫ 臨死体験をした時、20~30 人の親族のグループが、私を出迎えてくれた。一人の白衣の老婦人が、私は戻らなくてはならないという。私が黒衣の老婦人に、私は戻る必要があるのかと聞くと、そうだと答えた。何故かと私が聞くと、黒衣の老婦人は、使命が果たさ

れていないからだという。回復してから、黒衣の老婦人は私の曾祖母で、私が生まれる 2 週間前に死んだことと、白衣の老婦人は、私より 40～50 年前に生きていた曾祖母であることが分かった。」¹²⁾ この例では多くの親族がグループ意識として、臨死体験者を出迎えている。光の世界では皆年齢はピーク時に見えると言われているが、ここでは 2 人とも老婦人として表れているのは、地上の面影を留めて思い出してもらうためであろう。

⑬ 13 歳の時心停止。トンネルの先で 1 人との女性に会う。彼女は私を知っていたが、私は彼女を知らなかった。回復後 2・3 年たったある日、母が私の父方の祖母の写真を見せてくれた。その祖母は私がトンネルの先で会った女性だった。祖母は父の出産が原因で死んだ。それまで私は一度もその祖母の写真を見た事はなかった。¹³⁾

⑧ 臨死体験中であった死んだ親族が、自分の名前を名乗り、本当にその人物であることが、回復後その人の写真で確証される例がある。

① 1972 年 13 歳の時、心臓の手術中に、体外離脱をして暗いトンネルを通過して、光の世界に入った。そこで見知らぬ人と出会う。その人はアメリカの海軍の制服を着ていた。彼はとても背が高く、ブロンドの髪の毛で、ブルーの両目をしていて、私は彼を一度もそれまで見た事はなかったが、彼の方は私の事を知っていた。“私はお前の伯父のフラクリンだ。ドロシーに私は OK だ、赤子も私と一緒にいると言ってほしい。私はドロシーを愛している。彼女が死ぬ時がきたら、私はむかえにくると伝えてほしい。”一年後の感謝祭の日に、私は伯母に“フラクリンって誰なの”と聞くと、家族の者は皆驚いた。2・3 週間後、伯母のドロシーは、どうして私がフラクリンの事を知っているのかと尋ねた。私は臨死体験中にフラクリンに出会ったと言った。すると伯母は、私がそれまで一度も行ったことのない伯母の屋根裏部屋に、私を連れてゆき、私が見た事もない大きなトランクを開けて、数枚の写真を取り出した。その写真の人物は私が臨死体験中に見た人物とそっくりだった。叔母は叔父のジョージと婚約していたが、フラクリンと結婚した。フラクリンは出兵して戦死した。叔母は妊娠していたが、夫の戦死が原因で流産した。一年後に伯母は伯父のジョージと再婚し、フラクリンの写真を破棄した。家族のものもフラクリンの名を口にする者はいなかった。自分のトランクの中のフラクリンの数枚の写真のみが残されたと伯母は言った。¹⁴⁾ この例は、臨死体験中に出会った見知らぬ人物が、自ら名乗りを上げている点が、他の例と違っている。その見知らぬ人物の正体が、回復後写真によって判明する点は、他の例と共通している。

② 5 歳の時、脳炎が原因で臨死体験した。光の世界で 10 歳くらいの見知らぬ女の子が現れて、自分はあなたの姉だと名乗った。姉は、自分が生まれる一ヵ月前に、死んだ祖母の Williamette という名前を付けられ、両親は Willie と呼んだと言った。自分に姉がいることを体験者は知らなかった。姉は私に地上に戻るようにと言った。また、友人が現れ「地上に戻るように。」と言った。体験者はその友人が死亡したことを知らなかった。回復後に、

両親から私は入院した後に、その友人が突然心臓発作のために死亡したが、私の病状を心配して黙っていたので、回復後に初めて知らされた。姉の事を話すと両親はびっくりしてしばらくは当惑していたが、Willie という名の姉がいたが、姉は私が生まれる約一年前に不慮の中毒が原因で死亡したことを打ち明けた。私が成長するまでは、私と私の兄弟に話さないことにしていたという。また、姉の死を思い出さないように、姉の形見等は処分してしまったという。¹⁵⁾

③ 4歳の時、プールで溺れて蘇生術を受けた。臨死体験中に兄に出会い、兄は母が13歳の時、母の胎から引っ張り出されたと言い、母の中絶について詳しく述べた。母はこのことを秘密にして、誰にも話さなかった。このことで母は神経的になり、父は離婚しようとした。¹⁶⁾

この事例では、体験者の兄は、母親が13歳の時に中絶をされたので事柄の性格上極秘にされていたので、体験者が自分に兄がいたことを知らなかったことは確かであろう。どうして自分の兄と分かったかについては不明であるが、恐らく臨死体験中に会った人物が、自分の方から名乗りを上げたものと思われる。

④ 夫の暴力で意識を失いかける。トンネルの入口の所で、ある人物と出会うが、その人が伯父だと直ちに分かった。その伯父は、私が誕生する前に亡くなっていたので、地上では一度も会ったことはない。伯父はカーキ色の短パン、白いシャツ、黄褐色のスターベストを着ていて、紙バサミ付の筆記版板を持っていた。そのような姿の伯父は一度も見た事がなかった。伯父は「まだ死ぬ時ではない。」と私に言った。臨死体験後、だいぶ年が経ってから、祖母が死んだので祖母の写真を見ていると、臨死体験中に会った伯父の写真を見つけた。この伯父の写真をそれまで一度も見た事はない。¹⁷⁾

この事例でも体験者が、臨死体験中に会った人物を知らなかったが、後に（自分の誕生前に死んでいるので）地上で一度も会ったことのない伯父であることが判明している。臨死体験中に伯父と分かったかについては具体的に記されていないが、伯父の方から名乗りを上げたものと思われる。

⑤ ある少女が臨死体験をして、彼女の兄に会う。彼女は自分に兄がいないと思っていたので、回復してから父に聞くと、父は彼女が生まれる前に死んだ兄がいたことを初めて告白した。¹⁸⁾

⑥ コルトンは3歳の時、手術中に生まれる50年以上前に死んだ曾祖父に会ったという。曾祖父の写真を見つけてコルトンに見せると、コルトンは「天国では誰も年をとっていないし、メガネをかけていないよ。」と言う。そこで、曾祖父が29歳の頃の写真を母に頼んで送ってもらい、コルトンに見せると、「どうしてパパの写真を見つけたの？」と言った。父トッドは子供の頃、祖父と仲良しだったので、“パパ”と呼んでいたことをコルトンは知っていた。光の世界では、皆年齢が若くピーク期であるという臨死体験の共通項とも一致している。コルトンには曾祖父の写真を見せたことも、話したこともないという。¹⁹⁾

⑦ これも同じコルトンの例である。コルトンが“ママのぼんぼんで死んだ赤ちゃんがいた

でしょ？”と母親に聞くので、母親が“誰がそんなこと言ったの？”と聞くと、コルトンは“ママのぼんぼんで死んだって姉チャンが言ったの”という。流産したのは本当だが、4歳児のコルトンにそのことを話したことはない。“キャシー（姉）みたいに見えたよ。でも髪は黒いの”とコルトンは言う。コルトンの母の髪は黒。“その女の子の名前は何で言うの？”と母親が聞くと、コルトンは“名前はないよ。パパとママは名前を付けなかったでしょ？”と言う。女の子ということも分からなかったので、両親は名前を付けていなかった。“ママとパパがね、天国に来るのが待ちきれないって言ってたよ。”とコルトンは言う。

- 20)
- ⑧ 臨死体験中、サンドラが生まれる前に死亡した姉に会った。サンドラは姉がいたことは知らなかった。回復してからサンドラはその姉の絵を描いた。両親はそれを見て顔色が変わった。両親はサンドラが生まれる前に、姉は車に引かれて死んだことを打ち明けた。²¹⁾
 - ⑨ 臨死体験をして、パラダクスである人物を出会う。誰かと聞くと、私の兄だと言う。死んだ兄がいたことを私は知らなかった。回復後このことを両親に話すと、両親はショックを受けた。²²⁾
 - ⑩ 臨死体験した時、私が生まれる一年前に7歳で死んだ伯母を見た。その伯母が死んだ日に着ていた衣服と身に付けていた宝石を正確に言い当てることができ、このことが確認された。²³⁾

㊦ 臨死体験者が地上で会ったことはなく、見知らない死者が誰なのかが直感的に分かるというケース

代表的な例を引用しよう。

- ① 母が私を妊娠して二か月の時、父が車で死んだので、私は父に一度もあっていない。臨死体験の時、死んだ父が光の中に現れた。父の顔を見なかったし、父と話もしなかったが、私は父だと分かった。光のなかの他の魂たちと一つになった。この光の魂たちに私は帰属していた。父が“まだ死ぬ時ではないから戻れ。”とテレパシーで言った。²⁴⁾ この例では死んだ父と一度もあっていないのに、どうして父と分かったかが問われるが、テレパシーか直感で分かったことが示唆されている。光の中で他の魂たちと人となったということは、グループ意識（ソウルファミリー）に属しているので、お互いの事が直接分かったものと思われる。
- ② 自動車事故で臨死体験をした。死んだ曾祖母に戻れと言われる。曾祖母に、は一度もあつたことはないが、どういうわけか曾祖母と分かった。回復後それが正しいことが写真で分かった。その写真を私はそれまで一度も見た事はない。²⁵⁾
- ③ 難産で意識を失った女性が、自分が生まれる前に死んだハンナ伯母さんと、アブラハム伯父さんと会う。それまで会ったことはないが、二人が誰かはちゃんと分かった。

また、一度もあったことのない死んだ祖父母ともあった。²⁶⁾

④ 自動車事故で脳傷害になり、記憶を失った。しかし臨死体験だけは鮮明に記憶に残っている。私は5歳の時死んだ姉にあった。私はその時まだ1歳だった。しかし私には姉だと分かった。成長してから私は家族のアルバムを見て、それが私の姉であることを確認した。²⁷⁾ この例の場合1歳の時の姉の記憶はないと思われる。

⑤ 臨死体験の時、それまで会ったことのない人々と会ったが、どういうわけかその人達を、私は知っていた。²⁸⁾ この例の場合も地上では一度もあったことのない死者が誰なのか、テレパシーか、グループ意識（ソウルファミリー）の一員なので、じかに分かったものと思われる。

⑥ 臨死体験の時、イエスと会った。イエスは名乗る必要はなかった。私にはイエスと分かった。²⁹⁾ この例の場合、本人が知っているイエスのイメージと一致していた可能性がある。

以下の事例は、臨死体験者が地上ではあっていない人々が、同じグループ意識（ソウルファミリー）に属している人々であることを示している。

⑦ 臨死体験の時、私が誕生する前に死んだ祖母に会う。地上では一度もあっていない。前世で互いに別の姿で知り合っていたことが分かる。³⁰⁾

⑧ 臨死体験の時、光の存在のグループと出会う。私が前世で会った人々と会う。最近の前世、つまり死んだ親族だけではない。³¹⁾

⑨ 地上の肉体時には知らなかった死者と臨死体験中に会い、その死者が誰なのか 分かったというケース

死者が自分から名乗りを上げたのか、直感でわかったのかは不明である

① 死んだ祖父に会う。私が生まれる8年前に死去。回復後にこのことを祖母に話すと、祖母は祖父の写真を見せてくれた。それは私があったのと同じ人であったが、臨死体験中に会った祖父は、65歳で死んだ時よりももっと若かった。³²⁾

② 臨死体験をした時、私は赤子を抱いている伯母に会う。その伯母は私が生まれる前に、赤子の出産の時に死んだ。回復してから私はその伯母の事を母に話すと、母はそれが出産の時に死んだ伯母であることを認めた。³³⁾

③ 光の世界で私が生まれる前に死んだので、私は知らなかった父方の祖母が出迎えてくれた。回復後このことを父に話すと、父は彼女が自分の母であることを認めた。³⁴⁾

④ 1919年にまだ私が1929年に誕生する前に死んだ私の叔母に会う。回復後、それが私の叔母であることを、別の叔母によって確認できた。³⁵⁾

⑤ 臨死体験中に、体験者本人が知らない情報を、死んだ親族から伝えられるケース

①ある男性が臨死体験中に、死んだ孫娘にあった。彼女は母への伝言を彼に託した。

“すべてが素敵なので、ママとおばあちゃんに泣くのをやめるように言って。ママに霊媒が言うことをすべて信じることはしないように言って。”彼は孫娘が霊媒の所に通っていたことを知らなかった。彼は回復してから妻にこのことを伝え、妻は自分と彼女の娘が彼には内緒にしていたのに、自分たちが霊媒の所に通っていることを知っていることに、ショックを受けた。彼の妻にもこのことが事実であることが確認された。³⁶⁾

②ある南アフリカの男性が、1972年に両側肺炎が原因で臨床死になり、臨死体験した。臨死体験をする前に、彼は病院の看護師と親しくなっていた。彼が昏睡状態の時、その看護師は自動車事故で突然死んでしまった。臨死体験中に、彼はこの看護師と出会った。この看護師は彼に地上に戻るように、彼には必ず愛らしい妻が見つかると言い、さらに看護師の両親に21歳のプレゼントの赤いMGBを破損してしまったことを、お詫びしてほしいと頼んだ。この事この看護師の両親しか知らないことである。彼が臨死体験中に、その看護師が赤いMGBの事故で死んだことを知っていることを、回復してから話すと、周りの人達は驚いた。³⁷⁾

この例では臨死体験者は死んだことを知らなかった死者が、臨死体験中に現れた例である。赤いMGBがその看護師の21歳のプレゼントであることを、その看護師と両親しか知らなかったのであるから、臨死体験者が知っているはずのない情報を、死者から得ていたことになる。

③臨死体験をして死んだ友人とあう。彼は溺死した時のことを詳しく話してくれた。回復して数年ののちに、私はその友人の兄からその友人が溺死した時のことを詳しく確認できた。その友人の兄は身内の者しか知らない詳細なことまで、私が知っているのに驚いた。³⁸⁾この例の弱点は具体的なことが記されていない点である。

④臨死体験をして、光の世界で多くの死んだ先祖の人々に出迎えられた。死んだ伯父のドナルドは、彼の弟のジョージにメッセージを言づけた。回復してから、伯父のドナルドの言伝を弟のジョージに伝え、彼は顔色を変えて、私とドナルドしか知らないことを、どうして知っているのかと言って驚いた。言伝の意味は私にはわからない。³⁹⁾この例でも多くの親族が出迎えている。

⑤臨死体験中に死んだ義兄にあった。彼は“私の墓石が壊された。私の妻がその支払いをする。”という。退院してから義兄の妻にこのことを知らせると、彼女の義理の両親が義兄の墓を壊したので、新しい墓石を作り直したと伝えてきた。⁴⁰⁾

⑥ 臨死体験者が、その人が死んでいることを知らなかった親族や友人などと出会って

奇妙に思うが、回復後事実その人が死んでいたことが判明するというケース

臨死体験者本人は、その人が死んでいることを知らなくても、それらの死者達は臨死体験者の地上の人生に深くかかわった人たちであり、臨死体験者と同じグループ意識に属している人たちであり、地上の肉体時にはわからなくても、同じグループ意識として一体なので臨死体験者に現れたのである。同じグループのメンバーは情報を共有する。典型的な事例を挙げよう。

① 5歳の時、萎縮性脳炎で意識を失う。脳と肉体を超える意識にシフトすると、年長いた家族の友人が現れて、すぐに戻るようにと言う。回復してからこのことを話すと、家族は驚いて、私が入院した翌日、その友人は心臓発作で突然亡くなったと言う。その時まで私はその友人が死んだことを知らなかった。⁴¹⁾

② 臨死体験をした時、死者達に出迎えられた。1969年に死んだ私の父と、2・3か月前に死んだ私の隣の人と、私が死んだことを知らなかったもう一人の隣の人達である。私が死んだことを知らなかって隣の人については、私が臨死体験をした数日前に死んだことを、それから2週間後に母から聞いた。地上ではあったことのない人の霊にも、その時私はあった。⁴²⁾ この事例はグループ意識（ソウルファミリー）の存在を示唆している。

③ 臨死体験した時、光の中で死んだ伯父と死んだ伯母と、もう一人の伯父のディーに会った。伯父のディーは生きていたと思っていたので、回復後にそのことを母に尋ねると、伯父のディーは私が臨死体験をしたのと同じ日に、突然死んだことが分かった。⁴³⁾

④ 第一次世界大戦中スカーレット熱で入院中、突然パラダイスのような所に入ると、一人の若い士官の私のいとこが近づいてきた。彼は行方不明になったことは知っていたが、死んでいるとは知らなかった。制服姿のいとこを見た事は一度もない。第一次世界大戦中、イタリアでもイギリス軍兵士が着用していた制服を知らなかった。しかし、その制服を見た私は数年後に、いとこの写真で確認できた。いとこは大尉であることも分かった。⁴⁴⁾

⑤ レナーテ（女性）が命に係わる重病のため緊急入院、昏睡状態になり臨死体験中に死んだ父と一緒に伯母シルラと出会う。父は死んでいることを知っていたが、シルラはまだ生きていたと思っていたので、“どうしてここにいるのか？”と尋ねた。レナーテの夫がレナーテの母に会うと、レナーテの母は今日、私の姉シルラが3日前に死んだという知らせを受け取った。このことをレナーテに知らせてもよいかと聞いた。叔母シルラはレナーテの臨死体験の直前に死亡していたことが判明した。⁴⁵⁾

この事例の場合、レナーテの周りにいた人達もシルラの死を知らなかったため、テレパシーによってレナーテはシルラの死を知ることができた可能性はない。死亡している父と共にシルラが現れたのを見て、レナーテ本人も驚いていることから、レナーテがシルラの死を全く知らなかったことは確かであろう。

⑥ 銃で撃たれて緊急入院して手術中に、臨死体験中に母に会う。チリを出発する前に両親からイギリスの Norfolk に住むという手紙を私は受け取っていたので、母は元気で生きてるとばかり思っていた。しかし回復後、母が旅行中に心臓発作に見まわれ、イギリスに

到着して一週間後に亡くなっていたことが分かった。同じ臨死体験中に妹にも出会った。妹はチリで銃に撃たれたことを私は知っていたが、それが元で壊痕のために亡くなったことを私は知らなかった。⁴⁶⁾

この事例の場合、妹の方は銃で撃たれたことは体験者本人も知っていたので、妹の死の方は予想できた可能性があるかもしれない。

⑦ 父は臨死体験した時、二人の兄弟に会う。一人は数年前に死んだが、もう一人はたった2日前に死んだばかりで、父には知らせていなかった。父は回復後、もう一人の兄弟が数日前に死んだことを初めて聞かされた。⁴⁷⁾

⑧ H.ウィートリーは昏睡状態で、安らぎとのどかな気分で浮上していた時、自分がよく知っている地方自治体の役人が近づいてきて、“ようこそ、ウィートリー。後で君に会わなければならない。”と言って消えた。昏睡から覚めるとウィートリーは、この役人が死んでいたことを知らされた。⁴⁸⁾

⑨ ある女性が臨死体験をして、天国に行き若い男性の友人に会う。“トム、なぜあなたがここにいるの？”と聞くと、トムは今まさに到着したばかりだと言う。彼女は自分の体に戻る。しばらく後に、彼女の夫が電話で彼らの友人のトムが、自動車事故で死亡したと知らされた。⁴⁹⁾

⑩ アメリカのある男性が臨死体験の時、いとこと出会った。そのいとは、イギリスで死因だったので、アメリカの誰も、そのいとこの死を知らなかった。その後、この男性はそのいとは死んだという電報を受け取った。⁵⁰⁾

⑪ 母は臨死体験した時、いとこのルーシーと出会う。目を覚ました時、母はルーシーと会ったと言う。その後、ルーシーがメキシコでその日の朝、死んだという電話を受け取る。⁵¹⁾

⑫ 集中治療室で臨死体験をし、若い女の子と出会う。回復後、私が集中治療室にいた時、一人の若い女の子が死んだことを夫から知らされた。⁵²⁾

㉔ 臨死体験者が自分と同時に死んだ知人と出会うというケース

臨死体験者が、自分と同時に死んだ知人と臨死体験中に一緒になるという特殊なケースがある。この場合、臨死体験者は、その人が同じ時刻に死んだということは知らない。(もっとも想定内ではあるが) このケースの中には、自分の同時に死んだ知人から地上に戻るように言われる例がある。代表的な例を挙げてみよう。

① 車の事故で意識を失い、事故の記憶はない。純粹で無条件の愛と安らぎの光に囲まれる。夢から目覚めたようにリアルであった。助手席に乗っていた妻が“あなたは戻らなければならない。”と言った。二人の子供が車の後部座席に乗っていた。その内一人は死んで、もう一人は生きていることが後で分かった。⁵³⁾

② 50歳代の男性、1988年7月、明け方5時頃6歳年下の妹を助手席に乗せて車で帰宅中、雨上がりだったせいで車がスリップする。その直後の記憶はない。気が付くと、妹と並ん

で左後方 10m 位の上から自分の車を見下ろしていた。車は横に倒れた電柱に巻き付いて大破。妹は“兄ちゃんは戻りなよ。”と言う。その瞬間、私は車の運転席に横たわった状態で目を覚ました。上から眺めていた通り、左横に電柱があり、妹は私の左肩に頭を乗せ、まさに息を引き取る所だった。救急車隊員が来て、私と妹のバイタルサインをチェックし始めたので、私は“妹はもう死んでいるんだ。”と言った。妹は頭を電柱に直撃して即死だった。⁵⁴⁾

以下のケースは、臨死体験者の知っている人が、同時に死んだことを臨死体験者は知らなかった事例であるが、同時に死んだ知人から戻るように言われなかったが、地上に戻されたものである。

③ 死因臓発作で臨死体験。脳・肉体を超える意識にシフトして、父親が両腕に一人の男の子を抱えているのを見る。その子の母親が二人のそばに立っている。母親は泣き叫んでいる。看護師達が母親を慰めている。私はその男の子が私のいる大きな光の泡の中に浮動しているのを見る。その子は笑っている。12 日間、私は昏睡状態だった。通常意識が戻ると、集中治療室から私の病室に移されてから 2 日後、その少年に何が起こったのか尋ねると、私の姉は私が昏睡状態の内に、その子は死んだと言った。その子は私が臨死体験中に見た子を全く同じ姿だった。心臓発作前後の数週間の記憶は全くないが、この死んだ男の子と光の泡の中で会った記憶だけは鮮明に残っている。⁵⁵⁾

④ 臨死体験の時、深い黒い谷で私の隣のベッドの老女が現れた。暗い谷の向こうから、私の死んだ母が現れ、二人で谷を越えて向こう側に行こうとしたが、私は境界の所で谷に戻された。谷の向こうからは光と喜びと安らぎを感じた。私は自分の肉体に戻れると、私の隣のベッドにいた老女が死んでいるのに気が付いた。看護師達は、まだそのことに気付いていなかった。⁵⁶⁾

⑤ ドイツの 12 歳の少年の自転車が、バイクと衝突。暗いトンネルの先に光が見える。左手のドアは閉まっているので、右手のエレベーターで上に向かうと、そこに私と衝突したばかりのバイクの運転手がいたので驚いた。二人で上に着くと、長く白い棒を持った二人の見張り人が立っていた。バイクの運転手は、二人の見張り人の間のドアを興味深い空間に入っていった。私もその入り口を通ろうとした時、二人の見張り人は長く白い棒をクロスさせて、私が入り口を通れないようにした。その直後、私は道路上の壊された自転車と、血だらけの自分の身体を見た。それから昏睡状態になった。回復後、そのバイクの運転手は即死したことが分かった。この記憶だけは、その後長年経っても蘇明に残っている。⁵⁷⁾

⑥ 心停止。光の中で右手の大きなカシの木の陰の下に、私の親族のグループがいた。彼らは“戻れ。”と言った。その中に、私の祖父の声もあった。3 日後に回復して、祖父の事を尋ねると、祖父は 200 マイル離れた所で同じ時に、心臓発作で死亡したということだった。⁵⁸⁾

⑦ 臨死体験をし、ストレッチャー上で横たわっている私の身体を上から見る。その後、私

の霊は神殿に行き、友人のマイケルと会う。マイケルが同じ頃、死んだことを私はその時、全く知らなかった。⁵⁹⁾

まとめ

臨死体験の事例の中には、臨死体験者が①その人物が誰かも分からずに、ましてすでに死亡していることも知らなかった親族や友人や知人と出会っているケースや、その人物は知っているが、死んでいることは知らなかった人物と出会うケースが見られる。このようなケースの場合、臨死体験中に出会った死者を、臨死体験者本人の想像による幻覚とすることは無理である。臨死体験では、脳と肉体を超えた非局所意識は、グループ意識（集合的全体意識・ソウルファミリー）と一体になる。グループ意識には、臨死体験者本人の地上での生涯に関与した人々が属している。彼らは本来グループ意識として一体なので、物質や時間や空間や重力電磁力・二つの核力を超えた非局所意識として、脳と肉体を超えた知覚と情報処理能力を備えており、完全に情報を共有し、互いに完全に理解し合っているため、臨死体験者が地上の肉体時にはグループ意識の死者に関する知り得なかった情報を知ることができるものと考えられる。

註

- 1) プルーフ オブ ヘヴン、早川書房、2013,10~11 章。209~215
- 2) Pim van Lommel,About the continuity of consciousness,in:C.Machado,Kluwer Academic/Plenum Publishers, 2004,
- 3) サム・パーニア、科学は臨死体験をどこまで説明できるか、三交社、2005,107~110
- 4) Sam Parnia,Erasing Death,HarperOne,2013,136~137
- 5) Paul & Linda Badham,Immortality or Extinction? SPCK,1984,80
- 6) Peter & Elizabeth Fenwick,The Truth ithe Light,Headline,1996,116
- 7) 木内鶴彦、生き方は星空が教えてくれる、サンマーク 2003,78~81.107~108
- 8) P.M.H.Atwater,Children of the New Millenium,ThreeRiversPress,1999, 88~89
- 9) www.nderf.org/debora-e's-nde.htm
- 10)Vital Sign,vol.21,no.1,2002,14
- 11)M.Rawlings,Betond Death's Door,Thomas Nelson,1978,17~20
- 12)www.nderf.org/kathleen-b's-nde.htm

- 13) B. Elder, *And When I Die, Will I Be Dead?* ABC Enterprises, 1987, 22~23
- 14) J. Long, *Evidence of the Afterlife*, Harper Collins, 2010, 47~48
- 15) P.M.H. Atwater, *Children and the Near-Death Phenomenon: another viewpoint*, JNDES, 15-1, fall 1996, 8~10
- 16) www.nderf.org/achild's.htm
- 17) P.M.H. Atwater, *Millenium*, 172~173
- 18) www.near-death.com/forum/nde/02.html
- 19) E. Kübler-Ross, *On Children and Death*, Macmillan, 1983, 208
- 20) T. バーボ、天国は、本当にある、青志社、2012, 152~159. 204~207
- 21) T. バーボ、天国、164~168
- 22) J. Long, *Evidence*, 128~129
- 23) www.nderf.org/james-c-nde.htm
- 24) www.nderf.org/justin-u-nde.htm
- 25) www.nderf.org/derrna-c's-nde.htm
- 26) www.nderf.org/geoffrey-s's-nde.htm
- 27) Ch. サザーランド、光の中に再び生まれて、人文書院、1999, 26
- 28) J. Long, *Evidence*, 130
- 29) www.nderf.org/nannci-possible-nde.htm
- 30) www.nderf.org/derry-b-nde.htm
- 31) Daniel & Kathy Baber, *A Room Nearby*, Ghostlyder Pree, 2011, xii. 19
- 32) R. Kruger, *A Higher Good*, Publish American, 2005, 23
- 33) www.nderf.org/beth-b-nde.htm
- 34) www.nderf.org/rich-probable-nde.htm
- 35) Arbeitskreis Orgenes, Dorothea Rau-Lemke
- 36) www.nderf.org/chanlie-d's-nde.htm
- 37) P. Sartori, *The Near-Death Experiences of Hospitalized Intensive Care Patients*, The Edwin Mellen Pree, 2008, 297
- 38) K. Ring, *Lessons from the Light*, Insight Books, 1998, 64
- 39) B. Elder, *Whenn*, 20
- 40) www.nderf.org/mandy-j's-nde.htm
- 41) J. Michels, *Berichte von der Jenseitsschwelle*, Goldmann Arkana. 2008, 35~37
- 42) J. Long, *Evidence*, 128
- 43) www.nderf.org/sylvia-w's-nde.htm
- 44) www.nderf.org/joshua-c's-nde.htm
- 45) E. W. Cook, B. Greyson, and I. Stevenson. *Do any near-death experiences*

provide evidence for the survival of human personality after death?Journal of Scientific Exploration,vol12,no3,398~399

- 46)G.Ewald,An der Schwelle zum Jenseits. Mathias-Grünwaldverlag, 2001,40~41
- 47)R.Kent & V.Fotherby,The Final Frontier,1997,103
- 48)K.Ring,life at Death,Quill,1982,208
- 49)R.Crookall,The Study and Practice of Astral Projection,The Citadel Press,1960,21~22
- 50)T.Myers (ed.) Voices From the Edge of Eternity,Revell-Spire,1968,55~56
- 51)B.Greyson,Survival of Bodily Death, Esalen Center
- 52)www.nderf.org/darlene-K7s-nde.htm
- 53)www.nderf.org/fanny-p-probable-nde.htm
- 54)J.Olsen,I Knew Their Hearts,Plain Sight Publishing,2012,28~33
- 55)矢作直樹、人は死なない、バジリコ株式会社、2011,87~88.著者は東大附属病院集中治療部部長。
- 56)www.nderf.org/joy-b's-nde.htm
- 57)www.iands.org/nde-archives/experiencer-accounts/held-back.html
- 58)J.Michels,Zu Besuch im Himmel,benno,2011,15~18
- 59)J.Long,Evidence,127~128
- 60)www.org/casper-nde.htm